

京鹿子

京都府立総合資料館
〒600-8585 京都府京都市中京区
西ノ京1-1-1 電話 075-222-1111

8月号

豊 田 都 峰

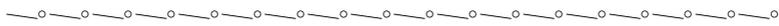
渥 響 集 その二十五

灯を星を数へて里の端居とす
かたはらに祖父の座いまもある端居
天道虫青き舞台の日矢の中
天道虫星背負ふゆゑ青を這ふ
天道虫発射角度は鎮守とす
木下闇透ける奥へはたどらざる





雲の峰それより奥はうしろとす
奥深くつくる茂りのそしらぬぶり
夏小花拾へばさそはる水ほとり
いくすぢも水を流して夏の苑
水落ちて垂れて涼しき日のかけら
夾竹桃機関区今日も油光り
向日葵をあふり北への列車過ぐ
みづいろに山遠くして夏木立



朝涼の身
丸山佳子

日傘 選る 玉蟲色の夢もちて
照りかへす土用の水に顔うつす
朝涼の身を姿見にあますなく
朝涼の身を爪だちて玻璃戸拭く
あらひ髪浮世の風にすぐかはく



秀華採集

葬送の朝濡れてゐるかたつむり

木山杏理

濡れなければならない時にすべてのものが濡れるのが自然の在り方。その中に涅槃図に入らないだろう「かたつむり」を持ち出したのは手柄である。

遊ぼうとかや吊り草に誘はるる

井尻妙子

短夜のルーペでさがす江戸古地図

貝路紅沙

前句、蚊帳吊草は茎を裂くなどの野の遊道具でもあるが楽しく詠うところがよい。後句は「短夜」の季語の設定がよく、逆にそんな時間を無視する入れ込みの思いがよく出ている。

鈴鹿 仁

河童忌

涼しさやまつさきに聴く石のこゑ

河童忌やかつば頑張る真昼どき

(かつばは水泳の上手な人)

雲湧いて祖の声となる墓参どき

風となり杜をはみだす蝉しぐれ

暗躍の蝉の穴にもゆめのあと

近 詠

和田 照海

妻木晩田遺跡

国引の杭もろともに梅雨に入る

蛇苺いろを尽して墳丘墓

国邑の石斧の銹や男梅雨

高床の梯子とぼして暴れ梅雨

暮れなづむ代田明りの日本海

神麓集



紫陽花

北村 香朗

箱根路の登山電車の濃紫陽花
紫陽花の大きな珠の手に余る
窓を打つ大紫陽花の瑞々し
手に余る大紫陽花の毬重し
線路走るスエツチバツクの濃紫陽花

雨蛙

藤岡 紫水

吹けば鳴る老いの草笛生きめやも
アンデスの風連れてくる葦の笛
一水の翳に動かかず雨蛙
嫋々の雨に杜若の残り花
梅雨闇や腹に灯ともす魚堤灯

松田 都青

太陽は腹式呼吸夏が来る
悟りとは風の無き日の鯉幟
滴るや虚構ばかりの一行詩
少しだけ義理の拍手をして薄暑
聖五月神は奇数を愛で給ふ

苔の花

丹生をだまき

お田植の時も陛下は笑み湛へ
謙譲の美德のつもり苔の花
人訪はぬ墓を被ひて苔の花
薫風になつて父母来ぬ写真古り
夏の灯に螺鈿の小宮発光す

試歩のぼす

山田をがたま

夏バテ恐れサプリメントをふやしもす
しみじみと隻眼かこつ五月闇
夕六時の凡鐘夏至の陽ざしの中
梅雨雲の垂れ工事音弼せり
梅雨晴間十歩を多く試歩のぼす

秋風の章

竹貫 示虹

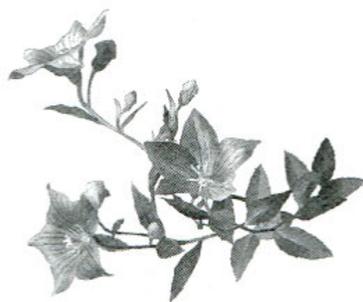
まはりから一人づつ減る秋の風
秋灯の一箭通過する鐵橋
天高し石階一段づつ登る
秋風に遊ばれてゐる「ゆ」のれん
廢校のどのガラスにも秋夕焼

神麓集



遠景は無口な巨船
 教会のゆるき勾配
 励ましの嘘のやさし
 朴の花記憶の底に
 散りぎわに肉声放つ
 朴の花
 柴田朱美

男ぶり良き葉脈の柏餅
 小塚道奈良へつながら
 恐縮は麦酒を注ぐ泡
 一万年の石はつめたし
 薬効に神の清水の力借
 青蜥蜴





京鹿子集

豊田都峰選

東京 木山 杏理

葬送の朝濡れてゐるかたつむり
裏山に梅雨茸の生ゆ乱気流

浮き蓋は檜作りや柿の花
ずぶぬれて本望ででむし角をふる

アリソナ 伊吹 之博

墓誌に触れし妣の使者かも青蜥蜴
掌中の青梅ころりと地球かな

登校時手を振る吾子や夏帽子
石楠花の薫る神前殿かに

京都 井尻 妙子

遊ぼうとかや吊り草に誘はるる
晩春の二人が違ふことを言ふ

霊界の師にも守られ虹の立つ
人助け覚えし看護士白い靴

澁川 東 秋茄子

郭公の日暮あしたは母訪はな
ブランコを漕いで自由を使ひ切る

次々と届きし思ひのカーネーション
その中に若き友よりカーネーション

久世 貝路 紅沙

短夜のルーペでさがす江戸古地図
柿の花五右衛門風呂の蓋を干す

被災地や今年祭はないといふ
遠き日の三社祭は祖父母の供

登校時愚図る子ありて良寛忌

さいたま 神田 惣介

茶房の娘のエプロン白し梅雨晴間

まだ続く余震に目覚め春の朝

余生には余生の矜恃更衣

お絵描きの幟りの鯉は空を指す

父の白磁わが手に馴染み新茶汲む

新品の傘の柄細し二重虹

雨だれの芯まで青き若葉かな

塩竈さくら神はいくつも名を持てり

白牡丹こゆるぎの香よ父母の国

深々と山あり西に春の雷

江戸川をくの字に曲げる走り梅雨

内臓をかかへて歩く夏日かな

河骨や水の記憶にある翳り

陶枕は水琴窟の音がする

居ながらにしての遠流や青葉木菟

ほととぎす一声とほす森の路

見逃がさじ車窓に咲きし柿の花

なめくぢり己が道跡残しつつ

前向きに伸びし生命の明易し

五月野は森の渚よ握飯

高層にゐてシヨパン聴く更衣

青梅を十個拾へば母のこと

折鶴の背に息たす梅雨入かな

卯月野や迷ひひとつは雲となる

夏草の奥へプラットホーム伸び

曙の先より暮るる行々子

えごの花水神様の祠跡

老鶯に写経の膝のふと崩る

躓きてひとりの苦笑春の月

土手青むくの字曲がりにラジコンカー

花菜はなな河川敷ゆく夕の鐘

兄弟げんかされど揃ひの夏帽子

境内の片すみ灯す七変化

ふる岩に露を点せり賀茂葵

大き目は貌小さく見ゆ夏帽子

遠潮騒闇おしのけて白牡丹

一張羅の市松人形夏きざす

人形の口のほころぶ五月闇

マネキンの省エネ衣裳青葉風

五月晴れ風評禍といふ野菜買ふ

えごの花題目並べ喜寿迎ふ

春の霜人間ドックは異常無し

腕時計外せぬままに春の風邪

高野 春子

布川 孝子

浦安 安田 一郎

直江 裕子

岡田 愛子

佐々木紗知

松戸 伊奈 勝代

児玉 有希